

群馬神流の旅 2018



2018年5月

旅のチカラ研究所 植木圭二

鯉のぼりの里で有名な群馬県神流(かんな)に5月2日～4日に友人と行ってきた。「いろり庵」という古民家での自炊、共同生活、宴会は実に楽しい。新しい仲間たちとの出会いもあり、古民家泊と仲間たちの素晴らしさを紹介する。

■一本のメールから

クルーズで知り合いになったNさんから群馬の古民家で面白い仲間たちと宴会合宿があるから行かないかというメールが入ったのが一ヵ月前のことだ。私は是非参加したいと返信した。そして本日、彼が運転する車の助手席に座っている。

Nさんは御年84才だが体も気持ちも若く、そのバイタリティや体力には頭が下がる。だから今、私が運転せずに彼の車に乗せてもらって、群馬への道を走っている。

後部座席には女性が座っている。彼女はNさんのクルーズ友達だが、私とは初対面だ。聞けばNさんのところに彼女から昨晚電話があつてこの宴会合宿のことを話したら、急きょ参加したいとやって来た行動力抜群の人だ。この人もまた、ただ者でない。

3人で向かうのは群馬県神流町にある古民家「いろり庵」。この宿は一般客を相手にするのではなく親しい友人たちだけに交流の場を提供している。換言するとプレミアム会員限定の宿だ。

そして今回そこで会おうとしているのが「サラリーマン文化芸術振興会」という集まりで、通称は「サラ文」。このサラ文のポリシーは、人生は仕事だけではなく趣味も重要で、この2つが相互に関係し合って初めて人生を楽しめるという。だから趣味や一芸に秀でた人が多いという。

その宴会合宿に参加するとは、私は武者震いのようなものを感じながらも期待感に溢れている。

■古民家探訪

神流川沿いに広がる集落の山の斜面に「いろり庵」がある。周りは普通の民家で、村の生活そのものだ。築120年の家がよく来たねと私たちを迎い入れてくれる。



家は確かに古い。囲炉裏が切ってあって、梁や天井はすすけて黒光りしている。柱が曲がって、戸は何とか開け閉めできるほどに年老いている。それでも温かみや頼もしさを感じる。

それは人々にとっては田舎のおばあちゃん的存在なのかもしれない。

サラ文の先行メンバー4人は既に到着していた。食料の調達に走り、裏山で掘ってきたというタケノコや、地元の人差し入れの山菜もある。東京在住なのに地元になじんでいる。

夕食の支度に入るがみんな手際良い。それに対して要領を得ない私はとりあえず見物だ。台所においても邪魔なので家の中を見学することにする。

養蚕農家だったらしく2階は蚕（かいこ）を飼うために広い。群馬県は養蚕によって栄えた時代があり、富をもたらす蚕は「お蚕様」と呼ばれていた。だからこの2階のスペースは貴賓室ともいえる。今は畳が敷いてあり、詰めれば20人くらいは泊まれそうだ。



そして古民家の隣に建っている蔵の中を探検させてもらう。

狸が住み着いていたので別名「狸御殿」とも呼ばれているが、今では狸は剥製だけで数匹の剥製が生きているかのように目を光らせている。

狸以外にも骨董品や農機具などいろんなものがあるが、私の目に留まったのは1955年の読売グラフという雑誌だ。私が生まれる前にこんな雑誌があって、さらにこんな山奥で読まれていたとは驚きだ。

■盛り上がりの夜

テーブルいっぱいの料理はほとんどが地元食材だ。まずは生ビールで乾杯、なんと部屋の片隅に生ビールのサーバが置いてある。それも営業用のサーバだから凄い。

乾杯して間もなくビールが終わってしまう。すると馴染みの酒屋に電話して10分もしないうち生樽が配達されてくる。酒屋の人は世間話をしながら生樽を交換し最初の一杯を注いでくれた。「この最初の一杯が格別に美味しいよ」と語る彼の言葉に嘘はなかった。本当に美味しい。

酒屋が帰ると、今度は近所の夫婦が山ほどのタケノコや山菜を手土産にやって来て宴会に加わる。旦那は武骨で少し怖い感じだが、とても優しくていい人だとNさんがそっとささやく。

その通りでメンバーの一人が足をくじいたと聞き、薬を取りに家に戻り治療までしてくれる。それも西洋薬ではなく昔からここに伝わる民間療法だ。これが効くらしい。何ともありがたい。

サラ文、恐るべし。地元社会に完全に根付いている。

聞くと、サラ文のメンバーの一人がこの家の持ち主で、その人が生まれて育った家だという。そうだろう、そうでないところまでいかない。

いや、それは私の勝手な思い込みかもしれない。自分が心を開けば、相手も開いてくれるから。

酒も入り、いろいろ出てくるのは料理だけではない。さまざまな芸も出てくる。

尺八の名手が演奏と口上で盛り上げれば、ピアノの名手もいる。私が驚いたのはロールピアノという楽器だ。クルクルと巻いた布を広げるとピアノの鍵盤が現れて片方の端にはスピーカとアンプが入った小さな箱がつながっている。収納はコンパクトだが、これでピアノ演奏ができるのはすごい。そしてこの流れから私も落語を演じることになる。

新しい仲間との出会いは実に面白い。私たちは夜が更けるのも忘れて人生や旅について語り合う。それは少年の頃に戻ったような気持ちかもしれない。

古民家はそのような語り合いの場にはとても似合っている。



■鯉のぼり 800 匹

現在では河原の両端にロープを渡して鯉のぼりを川幅いっぱい泳がせる光景は全国に広がっており珍しくないが、神流町のここ万場地区が発祥の地だ。1981 年から始まったということで、現在は 800 匹の鯉のぼりが気持ちよさそうに泳いでいる。

鯉のぼりが泳ぐ下の河川敷では屋台が出てイベントが開かれており、近郊の市町村や県外ナンバーまで多くの車が来ている。人口 2000 人弱の小さな町も、この時期は渋滞する。

私たちは渋滞を尻目にイベント会場に徒歩で行き、設置されたテーブルに陣取りビール片手に上州名物の焼きまんじゅうをほおぼる。ステージでは地元アイドルグループが歌っている。この山奥で若い女の子たちの歌や踊りはとても初々しい。それにしても最近では日本中どこでもアイドルだらけだ。



鯉のぼりによる町興しを考えた人は本当に凄いと思う。各家から要らない鯉のぼりをもって、言わば廃品利用によって町の一大イベントにしてしまった。

物事はアイデア次第ということだ、私の好きな言葉で「アイデア無限大」というのがある。

■面白どころ、いっぱい

この神流付近は鯉のぼりだけではなく近郊にも面白どころが多い。今回いくつか立ち寄ったので紹介したい。

神流湖というダム湖の南方にそびえる城峯山の山頂付近に城峯公園があり、展望台からの景色もよい。ここは冬桜の名所で 600 本の桜の木がある。残念ながらシーズンではなかったので閑散としていたが、車で上まで行けるので冬桜の咲く季節にまた来たい。

冬桜の見頃は 10 月下旬から 12 月上旬と看板に書いてあり、うまくいくと紅葉と桜が同時観賞できそうだ。日本全国でそんな場所は聞いたことがない。

不二洞という鍾乳洞が神流町の隣の上野村にあり、関東最大と名乗っているのを寄ってみる。内部通路 2.2km は 1 時間弱で歩ける。もちろん階段と照明が整備されている。400 年前に僧侶が中に入り修行に使ったらしく、内部の鍾乳石などは仏教的な名が付いているのも面白い。

隣接して 225m のスカイブリッジという大きなつり橋や、キャンプ場もある。テントサイトは林間ながら平坦地で良く整備されている。キャンプ 300 泊の私が言うので間違いない。

コテージもある。以前来た時に内部を見せてもらったが、綺麗で使いやすい構造になっている。

秩父に向かう県道 71 号線で県境のトンネルを越えて 6km 程行くと民家が現れる。携帯電話の基地局があってその隣の民家の庭に芝桜が咲いている。この時期は満開で素晴らしい景色を味あわせてもらう。一般の民家なので挨拶をして一言断ってから見せてもらうが、民家の方も慣れたもので気持ち良く受け入れてくれる。

同行したメンバーは非常に積極的だ。民家のおじさんに話し掛け、10 分くらい話し込み、木の实を食べさせてもらい、トイレまで借りる。何と凄い。



最後に、上野村というと御巢鷹山、1985 年 JAL123 便が墜落した現場がある。今回立ち寄りなかったが、私は数年前に慰霊登山をしてきた。

一番上の駐車場に車を置けば 30 分くらいで登れるので、事故を風化させないためにも、慰霊を兼ねた登山をお勧めする。